

たんの小史

## ふるさと端野

⑧

### 先達の方々

#### 駅通の移転と取扱人(その2)

端野駅通は、明治三八(一九〇五)年、二代目取扱人齋藤嘉藤治氏により、二区から緋牛内(現在の国道三九号から鎖塚に到る市道(端野町)五一号線交点附近)に移転されました。

また、駅通名も「緋牛内駅通」と、改称しました。

この移転は、美幌・端野間の道路(現在の国道三九号美幌・端野間)が、前年の三七(一九〇四)年開通し、中央道路と合流したためです。

このことよって、端野・嘉多山・網走を結ぶ中央道路(現在の道道網走端野線)と、端野・美幌・津別を結ぶ道路が合流し、従来の中央道路だけの時よりも通行量が増大し、地域開発が急速に進展しました。

この移転した年に、日露戦争が勃発し嘉藤治氏も出征し、明治四二(一九一〇)年、緋牛内で没し、駅通業務は長男の正

雄氏が継ぎました。

正雄氏は、札幌農学校真駒内獣医学学校を卒業後、根室支庁に勤めていましたが、父が亡くなった後、緋牛内に戻り駅通取扱人となり其の業務をするなか、獣医の資格を生かし家畜診療にもあたりました。駅通時代について書き残した文書等はなく、家族の思い出によるものしか知ることができませんが、端野小史「端野の夜明け・第一集」に、嘉藤治氏の妻ナツさんが齋藤正気氏に昔話として、

「赤い行のう(郵便物を入れて運ぶ袋)に郵便物を入れて、馬にだぐら(物を運ぶとき馬の背中につける荷鞍)をつけ、中継所(越歳駅通と端野駅通の中間にあり、これを中継所といい、現在の緋牛内 亀井正行氏宅から約1kmほど網走側付近にあったと言われています)まで運んだものだった。また、よく網走から囚人が逃げてくることがあり、ムロにかくれたこともあった。そのほか地区の人が亡くなった時などは、米や味噌などをわけてあげたものだった」

と記されており、当時は大きな馬小屋があり、八頭から一〇頭ほどの馬がおり、使用人も三、四人いたといわれています。

明治四四(一九一一)年、網走線(池田・網走間の鉄道)が完成し、端野に停車場、緋牛内に簡易停車場が設置され、大正元(一九一二年)年一〇月、全線の営

業が開始されました。

この年、端野市街に「無集配端野郵便局」が設置され、嘉藤治氏は初代の局長に就任しました。

そのため、駅通業務を弟の正氏に譲り、正雄氏は駅通付属地(緋牛内市街地)で、運輸業、雑貨商を始めるとともに、緋牛内簡易停車場の普通駅への昇格の運動を展開し、大正一〇(一九二一年)、緋牛内駅に昇格しました。

また、正雄氏は駅通付属地の緋牛内市街地を開放し、開拓初期の緋牛内の開発の一翼を担い、また、大正一〇年四月一日、野付牛町から端野村が分村した年から、昭和一七(一九四二年)年までの間、端野村村会議員として、村の振興発展に大きく貢献されました。

この駅通は、大正一一(一九二二年)年二月、三〇年にわたる歴史の幕を閉じました。

中央道路が開通し沿線に駅通が設けられ、この地方に入地したり、旅をする人たちにとって、駅通が果たした役割は計り知れないものがあり、かつ、駅通取扱人は地域の世話役であり、開発と地域発展に中核的役割を果たしてきた先達の人と言えます。

田中 誠

(裏面に続きます)



二代目取扱人 斎藤嘉藤治氏一

2号端野駅通見取図

